

ルカ福音書の3章から6章11節

ルカ福音書の3章から6章の11節までの段落を分析しています。この範囲は大きく2つに分けられます。3章1節から4章44節までと、5章1節から6章11節までの2つに大別できると思います。ここではまず3章と4章の部分を見ていきます。

参照として、4章では御霊のバプテスマ、悔い改めのバプテスマがあり、聖霊が下って悪魔・悪霊と戦うという流れがあります。その下の段（後半の部分）でも、主の御霊の力に満ちあふれ、主の御霊が宿っていることが示されます。その御言葉には権威と力があり、そこで悪霊を退け、戦っているという構図が描かれています。

4章では、敵は悪魔・悪霊であり、聖霊に満たされたイエスが彼らと戦っている場面です。一方、5章と6章の部分では、イエスと弟子たちが登場し、またヨハネの弟子たちも出てきます。ここでの敵はパリサイ人と律法学者たちです。つまり、前半（3～4章）が悪魔・悪霊との戦いであるのに対して、後半（5～6章前半）はパリサイ人や律法学者という偽善者たちとの戦いが描かれるという対比が見られます。

パリサイ人たちに対して「まむしのすえ共」と言っているのは、確かマタイ福音書であったかと思いますが、ルカの文脈では群衆に向かって語られています。ただ、パリサイ人たちは「まむしの子ら」と呼ばれ、偽善者としてイエスに対抗する存在です。要するに、前半は悪魔・悪霊との戦い、後半は偽善者であるパリサイ人との戦いという構図があるわけです。

この戦いの中で大きな括りとして、「神の子は誰なのか」「メシアは誰なのか」「アブラハムの子孫は誰なのか」「救われる人たちは誰なのか」という問いが、この段落全体の大きなテーマになっています。前半（3～4章）では「神の子」という言い方が共通して用いられています。サタンも「神の子なら…」と言及しますし、「あなたこそ神の子です」と悪霊も言います。また系図の部分でも「誰々の子」という繰り返しがあり、最後にアダムを「神の子」とすることで、神の子という概念が強調されています。

これに対して、5章以降では「人の子」という表現が強調され、人の子が地上で罪を赦す権威を持っていること、人の子は安息日の主であることが示されます。つまり「神の子」と「人の子」という対が示され、メシアであるイエスのアイデンティティが強調されます。そして「アブラハムの子孫」は誰なのか、多くの群衆が集められることとの関係が、この構成によって並行して描かれているようです。

後半（5～6章）の方がわかりやすいかもしれません。多くの群衆が集まってきて、漁に出て大勢の魚がとれたり、おびただしい群衆がおり、それは象徴的に「アブラハムの子孫」が石ころからでも起こせるという3～4章の宣言と対応しているように見えます。収税人やローマの兵士といった異邦人たちが悔い改めに応じようような場面が3～4章にもあり、またエリアの時代に多くのやもめがいたのに異邦人であるシドンのやもめが選ばれたり、たくさんのらい病人がいる中でナアマン（異邦人）が癒やされたりすることが語られています。これらは、アブラハムの子孫が異邦人にも及ぶ可能性を示唆しています。

多くの群衆はイエスのところに教えを聞き、病を癒していただくために集まってきます。教えと癒しがイエスのもたらす恵みであり、それは安息日に行うべきこととして「善を行うこと」「命を救うこと」と結びついています。安息日の主である人の子は、罪を赦す権威を持ち、病を癒し、善を行い、命を救います。前半で示されていた「神の子」なるイエスが、後半では「人の子」として人々を招き、悔い改めに導き、多くの人々に救いをもたらす構図が浮かび上がります。

3～4章ではアブラハムの子孫が石からでも起こされると語られ、悔い改めた収税人やローマ兵などが登場します。また、異邦人であるシドンのやもめやナアマンが救いの対象として例示され、悔い改めを促す預言者としてバプテスマのヨハネとエリアが対応します。5～6章では、人の子であるイエスが罪人を招き、悔い改めさせ、人間を獲る漁師にするというテーマで多くの群衆が集まることが描かれます。多くの群衆（異邦人、罪人、収税人）を招き、悔い改めに導くことは、漁師として人々を集めるイメージと重ね合わされま

す。

こうした構成全体から、「神の子」であるイエスと、「人の子」でありメシアであるイエスが、悪魔・悪霊と戦い、またパリサイ人や律法学者という偽善者たちと戦いながら、アブラハムの子孫が誰であることを明らかにしていく、という全体の文学的構造が浮かび上がっていると考えられます。